令和８年度山口県立大学 国際文化学部国際文化学科
学校推薦型選抜（県内高校枠） 「小論文」問題用紙（持ち帰り）

次の文章を読み、以下の問（問１、問２）に答えなさい。

日本語は、日本国内だけで使われ発達してきた言語です。日本は島国ですから、国境線と言語の境界線がほぼ重なっている。こういった国家や言語は実は珍しいのですが、日本人はそれを当たり前と考え、あまり意識していません。それだけではなく、人口や職業の流動も少なく、限られた土地で暮らしていると、同じ生活習慣、同じ価値観を持つ共同体が生まれます。そのなかにいる限り、言葉で多くを説明しなくても互いに理解しあえます。

言語学では、このような社会を「ハイコンテクスト」な社会といいます。コンテクストというのは、直訳すれば「文脈」ですが、ここではその言語が使われるコミュニケーションの基盤、文化的な背景のことです。日本は世界の中でもとりわけハイコンテクストな社会です。

一方、ヨーロッパは異なる価値観、異なる文化的背景、異なる宗教を持つ人たちが陸続きの国で暮らしてきました。人と出会ったときには、相手が敵か味方かわかりません。どのような文化で育った人かもわからない。自分が何者で、何を愛し、何を憎み、どんな能力で社会に貢献できるかを明確に相手に説明し、伝える必要がありました。自分のことを詳細に説明しなければ、相手にわかってもらうことができません。共通する価値観や生活習慣、文化などがあまりない、こうした社会を「ローコンテクスト」な社会といいます。

私は日本社会を「わかりあう文化」「察しあう文化」、ヨーロッパ社会を「説明しあう文化」とも呼んできました。

これは大雑把な分類で、もちろん例外もたくさんあります。また、どちらが良くてどちらが悪いという話でもありません。日本では、わかりあい、察しあう文化の中から素晴らしい芸術を生み出してきた。俳句や短歌などがその顕著な例です。正岡子規（1867～1902）のこの句を見てあなたは何を思うでしょうか。

柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺

日本人の多くは、このたった十七音だけで、奈良・斑鳩の里の寂しげな風景を思い浮かべることができます。

世界に目を向けてみると、日本ほどの大きな国家で、ここまでハイコンテクストな社会はほとんどなく、多くの社会では相手がわかるようにていねいに言葉で説明する必要があります。そこに良し悪しはありませんが、「日本のようなハイコンテクストな社会は少数派だ」と認識しておくことが必要です。

ただ、少数派だからといって卑屈になる必要もありません。たとえば芸術の世界では少数派のほうが有利になる場合もあります。

私が世界中の劇場からオファーをいただいてきたのは、私が世界的に見れば少数派に属するハイコンテクストな日本社会の文化を背負い、日常的に使っている日本語の特徴を活かして戯曲を書いているからです。そして、それを相手にわかるように、相手の文脈に翻訳して説明できるからです。決して自分の文化を卑下したり、相手の文化に合わせたりする必要はありません。ただ、相手の文脈で説明する能力は必要だということです。

（―中略―）

韓国との合同公演の際、私の劇団の舞台監督が、韓国の担当者に詳細なスケジュールを作って渡したところ、なぜか相手が怒りだして紙を破ってしまったことがありました。日本なら公演に向けてスケジュールを立てみんなで共有して進めるのが当たり前ですが、先方は、急かされているか、「きちんと進めてくださいよ」と念押しされているように受け取ったのかもしれません。

豊岡の城崎国際アートセンターで行ったフランスとの合同公演では、休みの日に観光に連れて行くことになっていたのですが、訪問地の希望を尋ねると、鳥取砂丘、天橋立、神戸など一人ひとりの答えがバラバラでまとまらず、どこへ行くかがなかなか決まりませんでした。予定が立たずに困っていたとき、ドイツから一枚のファクスが届いたのです。

「二年後のオペラの通し稽古は1時15分からでいいですか」

お隣のフランスとドイツでこんなにも違うのかと驚き、とても印象に残っています。

初めのころは、フランスよりも、私たちと考え方の似ているドイツで仕事をしているほうが楽だなあと思いましたが、フランスの人は背景や言語の構造が全く違う文化を新鮮だと感じ、面白がってくれるので、ワークショップを行っても非常にリアクションがいい。コンテクストの違いを受け入れて面白がる彼らとの仕事は、私自身もいろいろ発見があり、勉強になるなと思うようになりました。

また、フィリピンのマニラでは、一ヶ月半、稽古をしたのですが、その間、集合時間に全員が揃ったことは一度もありませんでした。これには理由があって、マニラは毎朝大渋滞になり、バスが時間通りに来ないのです。通勤時間が読めないのが当たり前という前提でみんなが暮らしているため、時間を厳守しなくても社会が回っている。

日本人は正確に時間を守り、計画を立てることが得意ですが、臨機応変に計画を変更したり、変化に対応することが苦手です。経済構造が変わっても、五十年前に作ったダムの計画を見直すことができなかったりする例は、その最たるものでしょう。こうした融通の利かなさが、三十年間にわたる日本の経済停滞を引き起こしていることも事実です。

もちろん、こういった民族性、国民性には多くの例外があります。「あいつはフィリピン人だから時間を守らない」といった決めつけは、人種偏見につながります。大事なことは、個々人の行動の背景にある「文化」を理解しようとする態度です。

さまざまな異文化と出会い、「コンテクストの違い」を知ることは、自分の国の良さを再認識することにも、欠点に気づくことにもつながるのです。

（出典：平田オリザ『ともに生きるための演劇』NHK出版、２０２２年、４３－４５頁、９０－９２頁。出題のため、一部改変している）

問１　下線部について、なぜ、日本人の多くは、このたった十七音だけで、奈良・斑鳩の里の寂しげな風景を思い浮かべることができるのか、200字以内で説明しなさい。

問２　あなたは、日本、韓国、フランス、ドイツ、フィリピンの人々と一つのプロジェクトを実行することになりました。はじめにそれがどのようなプロジェクトかを説明し、どのように準備し実行するか、600字以内で述べなさい。なお参加者全員が、共通の言語（例えば、英語）を、同じレベルで運用できると仮定します。

令和８度山口県立大学 国際文化学部国際文化学科
学校推薦型選抜（県内高校枠）「小論文」出題意図と評価基準

出題採点委員

（１）出題意図

筆者は、自らの経験に基づいて、異なる国や地域、異なる言語や文化を持った多様な人々と交流する視座を、現代日本の若者に平易な文章で提供している。

問１は、日本人の多くが、わずか１７文字の俳句が描く情景を共通に想起できるのは、ハイコンテクストな社会において、つまり限られた土地で、同じ生活習慣、同じ価値観を共有して生まれ育ったからだという著者の考えを理解できているかを問うことによって、日本語の文章理解力と表現力を測る。

問２は、日本以外のさまざまな土地で、異なる生活習慣、異なる価値観を持つ人々が、一つのプロジェクトの実現に向けて共同作業をするという、いわゆるローコンテクストな場面を設定して回答させることにより、ハイコンテクストな社会・文化の中で生活している者が、国外の多様な社会・文化的背景を有する人々と交流するために、思考・判断・表現の能力を有しているか総合的に測る。